神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

英語中間構文と反使役化：初谷論文への回答

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-12-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 本多, 啓
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2426

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

英語中間構文と反使役化—初谷論文への回答—

本多　啓

1　はじめに[1]

本稿は英語の中間構文に関する拙論（本多（2002，2005，2013c，2014）ほか）を批判的に取り上げた論考（初谷（2014，2015））に対するコメントである[2]。

まず議論の前提として、第2節で拙論の概要を再録する。第3節でその議論に対する初谷の批判の概要を示し、それに対する筆者の回答を提示する。第4節で英語中間構文に関する初谷自身の見解を紹介してコメントする。第5節はまとめである。

2　中間構文に関する拙論の概要

2.1　成立のメカニズムに関する仮説（本多（2013c，2014））

初谷（2014，2015）の議論の検討に入る前に、初谷が問題とする拙論の概要を確認しておく。

時系列順に言えば、初谷（2014）は英語中間構文における動作主の位置づけについての議論を問題としており、初谷（2015）は中間構文成立のメカニズムについての議論を問題としている。しかし拙論においては動作主の議論は構文成立のメカニズムについての議論を前提とするため、まずは構文の成立のメカニズムに関しての拙論の再録から始める。

拙論は中間構文を次のような能格自動詞構文[3]に由来するとみる立場であ

---

[1] 何よりもまず拙論を取り上げて議論の対象としてくださった初谷智子氏に感謝申し上げます。本稿の一部は神戸市外国語大学における2016年度の大学院授業の内容の一部に基づいています。授業に参加してコメントをくださった方々、特に萩澤大輝氏と上林史弥氏に感謝します。本稿の内容の不備に関する責任は本多にあります。

[2] 中間構文を扱った初谷の論考としてはこの他に初谷（2016）があるが、これについては拙論に対する批判が含まれていないため本稿では扱わない。

[3] 本稿では「（有対）能格自動詞」を *open*、*break* のような有対自動詞（対応する他動詞がある自動詞）を指すのに用い、「（無対）非対格自動詞」を *happen*、*go* のような無対自動詞（対応する他動詞のない自動詞）を指すのに用いる。「（無対）非能格動詞」は *cry* などの無対自動詞に用いる。

る[4]。

（1）　The door opens.　（有対能格自動詞）

Fellbaum（1986: 6）が次例に関して指摘するように、有対自動詞による状態変化構文は変化の原因に関して複数の解釈がありうる。

（2）　The door closes easily.　（有対能格自動詞）
　a. The door closes easily; it only takes a gust of air.[5]
　b. The door closes easily; you just have to press down.[6]

すなわち英語の有対自動詞による状態変化構文は（2a）のように人間の動作主が関わらない場合だけでなく（2b）のように動作主が読み込まれる場合にも用いられうる。これが中間構文成立の基盤となる。

そして英語の有対自動詞は形態的に自他同形であることから他動詞としての再解釈が行われうることになる。その再解釈の結果成立するのが中間構文である。これをまとめると次のようになる。

（3）　英語中間構文の成立
　THEME ＋有対能格自動詞
　→動作主が読み込まれる
　→（自動詞と他動詞で形態論上 overt な違いがない）
　→ PATIENT ＋有対他動詞として再解釈（中間構文）

このような過程によって次のような有対他動詞に基づく中間構文が成立することになる。

（4）　The door closes easily.　（有対他動詞）[7]

中間構文がヴォイス・可能の構文として成立すると、有対他動詞からそれ以外の動詞に拡張されることになる[8]。

（5）　a. This book reads easily.
　b. This piano plays easily.　（無対他動詞）[9]

---

[4] Fellbaum（1986），Denison（1993），Sakamoto（2001）。
[5] この *easily* は “at the slightest provocation, without much causation” と解釈される。
[6] この *easily* は “with ease, with no difficulty” の解釈である。
[7] Sakamoto（2001）の言う “unaccusative-based middle”。
[8] Sakamoto（2001），萱原（2006）。
[9] Sakamoto（2001）の言う “action-oriented middle”。

これが一般に中間構文のプロトタイプとされる事例である。

中間構文成立のメカニズムに関するこの仮説が妥当であるとすると、中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は次の（6）ということになる。

（6）中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」である。

open、*close*、break などの有対自動詞である能格自動詞に（6）が生じたものからいわゆる中間構文が始まっていると考えられるわけである。

そして、この「ゼロ動作主の読み込み」のプロセスは無対自動詞（非対格自動詞、非能格自動詞）にも生じうるものである。以下に例を挙げる。

次例は無対非対格自動詞を含むものである。

（7）　a. The shelving **comes to pieces** for easy transport.
（= divides into separate parts）[10]

b. The whole thing **comes apart** so that you can clean it.[11]

この例において *come to pieces* / *come apart* は明示されていない動作主によって意図的に引き起こされるものと捉えられている [12]。

次は無対非能格自動詞を含むものである。

（8）　a.　Some people **cry** easily.
（Y and T（2004: 317），T and Y（2006: 367））

b.　The baby **sleeps** for you but not for me.
The baby **sleeps** when you're in charge [or: on the scene] but not when I'm in charge.　（McConnell-Ginet（1994: 234））[13]

このように、拙論の立場では英語中間構文の発生・成立におけるもっとも重要な契機は（6）の「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」である。これは（1）のように有対能格自動詞を含む文だけに起こるものではなく、（7）のような無対非対格動詞を含む文や（8）のように無対非能格自動詞を含む文にも起こりうるものである。これによって動詞の種類を問わず [14]、無標識の可能

[10] 例文と意味記述は *LDOCE* s.v. **piece** による。
http://www.ldoceonline.com/dictionary/piece_1

[11] *LDOCE* s.v. **apart** http://www.ldoceonline.com/dictionary/apart

[12] 実際、（7）は中間構文の典型例の性質とされるもののほとんどを満たしている。詳細は本多（2013c, 2014）に譲る。

[13] 例文は McConnell-Ginet（1994）によるが、McConnell-Ginet 自身はこれらを中間構文に含めていない。

[14] 実は自動詞だけではなく他動詞にもこのプロセスは適用されうる。詳しくは本多（2017）で議論したが、ここでは例文を一つだけ挙げるにとどめておく。

（i）He would not betray his party so easily.　（https://www.fanction.net/s/8950245/1/Broken）

表現が成立することになる[15]。

ただ、(1) のような有対能格自動詞の場合には自動詞と他動詞の間に形態論上 overt な違いがないため、「THEME ＋有対能格自動詞」が「PATIENT ＋有対他動詞」として再解釈され、(4) のような有対他動詞の中間構文が成立する。そこから無対他動詞に拡張されれば (5) のような典型的な「能動受動」としての中間構文が成立するわけである。

以上が英語中間構文の成立のメカニズムについての本多 (2013c, 2014) の議論の概要である。

2.2　ゼロ形の動作主の位置づけについて (本多 (2013c))

happen、*open*、*sleep* といった自動詞による文にゼロ形の動作主が読み込まれるという拙論 (6) のメカニズムは一見奇妙なものに見えるかもしれない。しかし実際にはこれは自然なものである。

たとえば *OALD* の *happen* の項[16] には次の記述がある。(9) では動作主の読み込みは起こっていないが、(10) では動作主が読み込まれている。

(9)　to take place, especially without being planned
　　a. You'll never guess what's happened!
　　b. Accidents like this happen all the time.
　　c. Let's see what happens next week.

(10)　to take place as the result of something
　　a. She pressed the button but nothing happened.
　　b. Just plug it in and see what happens.

happen は自動詞であるが、(10a) では主語の *she* が、(10b) では命令文の主語としての *you* に相当する聞き手が、それぞれ後続の文で *happen* によって表わされる事態を引き起こす (あるいは引き起こし損ねる) 動作主として読み込まれるわけである[17]。

したがって、(6) の「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」とは言い換えれば次のようになるものである。

[15] これについては本多 (2020 予定 a) などで議論する予定である。
[16] https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/denition/english/happen
[17] ただし本稿では (9) と (10) を *happen* の多義的別義と考えるわけではなく、*happen* の語義は (9) と (10) の上位概念に相当するものと考えている。これは、「大学生」が「大学 1 年生」「大学 2 年生」「大学 3 年生」「過年度生」のいずれをも指すことができるということから「大学生」に 5 つの語義があることが導かれるわけではなく、「大学生」の語義はこれらの上位概念に相当する 1 つのものである、ということと同様である。これについては本多 (2020 予定 b) で議論する予定である。

（11）誰かが何らかの意図ないし目的をもって行為を行った時に、その行為の目標（ないし結果）として発生すべき（発生する）事態が自動詞文として述べられる。

この「誰か」に当たるものが話し手自身である場合に中間構文が成立する。したがって（11）をより詳しく述べれば次の（12）のようになる（本多(2013c)）。

（12）　a. 話し手自身が動作主。
　　b. 意図をもって行為する。
　　c. 自動詞が表す事態は、行為の結果状態・行為の目標。
　　d. やってみたけどうまくいかなかった／やってみたら思いがけずうまくいった。

ただしこれは本多（2013c）時点でのまとめである。実はこの考え方には問題点がある。それは英語中間構文が可能表現として機能する仕組みが説明できていないということである。現時点での筆者の考え方はこれに原因帰属を加えたもので、次の（13）（14）である。

（13）　中間構文の発生・成立における最初の契機は
　　a. 自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み
　　b. 原因帰属
　　である。

（14）　a.（明示的に表現されない）話し手自身が動作主
　　b. 意図をもって行為する
　　c. やってみたけどうまくいかなかった／やってみたら思いがけずうまくいった
　　d. 行為の目標ないし結果に相当する事態を自動詞文で表す
　　e. 行為の成否の原因を主語に帰属

本多（2009a，2009b，2015a）そして特に本多（2015b，2017）で述べたように可能表現の認知的な動機づけは原因帰属にあると考えられる。そして英語中間構文が可能表現としての意味を持ちうること、あるいは英語中間構文に限らず日本語においても自動詞的な表現ないし「自発」「出現」の表現が可能表現としての意味を発達させる現象がしばしば見られること、これらについてもその認知的な基盤が原因帰属にあるというのが現在の筆者の考え方である（本多

(2017))[18]。

なお、(6)（12）（および（13）（14））において動作主としての話し手は話し手自身による概念化の対象とはなっていない。したがってこの話し手は認知文法の用語では subjective construal / subjectively construe されていることになり[19]、本多（2005）の用語では「直接知覚された自己」特に「エコロジカル・セルフ」ということになる。

また、この動作主の立場には自身の状態に関して他の行為者と有意な差がないと信じることができる限りにおいて誰でも立つことができる（観察点の公共性 ; 本多（2002, 2005））。中間構文が話し手に限定されない「任意の」動作主にとっての行為の可能性を表す認知的な基盤はこれに求められることになる。

以上が拙論（特に本多（2013c））におけるゼロ形の動作主の位置づけである。

次節でこの議論に対する初谷（2014, 2015）の批判を検討する。

3　拙論に対する初谷の批判とそれに対する回答

3.1　中間構文の成立のメカニズムをめぐる初谷（2015）の議論

第 2.1 節に要約した英語中間構文の成立のメカニズムに対して初谷（2015: 3）は次のように批判している。

（15）しかし、先に、ある対象物を主語とする自動詞構文が存在し、そこに（ゼロ形とはいえ）動作主を読み込んだときに、いきなり主語名詞句が PATIENT として再解釈される、という主張にはかなり無理があるように思われる。統語的観点から見て、他動詞の PATIENT と解釈される対象が、受動化も受けずにただちに主語に繰り上がることが認められると仮定するのであれば、なぜ受動化のプロセスを経なくてすむのかという理由の説明が必要であろう。また、意味的な側面でも、自動詞構文がそのままの形で他動詞構文と再解釈され、さらにその際に「任意の人にとっての実行可能性」という意味合いが付与される、という考え方は、主体化という漸次的プロセスを全く想定せずに、客観的記述を一足飛びに主体表現として読み替えるプロセスであり、過剰な一般化を招く恐れがあると思われる。　（初谷（2015: 3））

この議論は統語的な観点からの議論と意味的な側面についての議論の 2 点か

[18] これについては本多（2020 予定 b）などで議論する予定である。
[19] 認知文法の用語としての subjective construal / subjectively construe についての筆者の考え方については本多（2016）を参照されたい。

ら構成されている。それぞれについて検討する。

統語的な観点についていえば、拙論は「他動詞の PATIENT と解釈される対象が、（略）主語に繰り上がる」というような派生ないし統語演算を想定しているわけではない。拙論で想定しているのは（16a）から（16b）をへて（16c）にいたる再分析と構文化および構文拡張（Traugott and Trousdale（2013））であって、（17a）から（17b）を派生する統語演算ではない[20]。

（16）　a. THEME －能格自動詞
　　↓（再分析）
　　b. PATIENT －有対他動詞
　　↓（構文化→構文拡張）
　　c. PATIENT －他動詞（有対・無対）

（17）　a.　　有対他動詞－ PATIENT
　　b. PATIENT －有対他動詞

意味的な側面に関して言うと、まず自動詞的な表現に動作主が読み込まれることはすでに述べたように決して突飛なことではない。能格自動詞構文においては（2）にあるように述べられる事象の原因は人間の意図的な行為でありうる。その意図的な行為を行う人物が話し手と一致する場合が中間構文成立の出発点であるというのが拙論の立場である。

他動詞構文としての再解釈はいわゆる脱範疇化に類するものであると考えられる。

中間構文が「実行可能性」の意味合いを持つようになった仕組みについては確かに本多（2002，2005，2013c，2014）の議論では明らかにされていないが、これにはすでに述べたように原因帰属が関わっていると考えられる。動作主が「任意」であることは観察点の公共性による。

主体化（subjectication）に関しては、Langacker の認知文法で言う主体化概念の基礎にある subjective construal の概念が拙論で言う「直接知覚される自己」ないし「エコロジカル・セルフ」と親和性が高いことはすでに述べた通りである。

「過剰な一般化」で何が想定されているのかは明確ではないが、これに関連すると思われることについて第 4 節で検討する。

初谷（2015: 6）はまた、次のようにも述べている。

---

[20] これは本稿が（2）および（4）を “bridging context”（Evans and Wilkins（1998, 2000），Heine（2002））と考えているということでもある。

（18）また、本多（2002）は、中間構文がそもそもアフォーダンス知覚を表現している構文であるので、当然 *can* の意味が読み込まれるとしている。しかし、本多が想定している中間構文の成立プロセスは、上でも述べたように、「自動詞文にゼロ動作主を読み込む」というものであり、ある構文の新しい用法の成立過程として、構文を使役化すると同時にその使役主を完全に主体化してゼロにする、というのはかなりアクロバティックなプロセスであると言わざるを得ない。使役主を主体化するプロセスにもう少し具体的な説明が必要であろう。（初谷（2015: 6））

繰り返しになるが、英語中間構文が可能表現になる仕組みについては本多（2002, 2005, 2013c, 2014）の議論では明らかにされていないが、これにはすでに述べたように原因帰属が関わっていると考えられる。

また、拙論が想定するプロセスが「アクロバティック」と評されているのは（17）のような統語演算が想定されたためと考えられるが、実際に拙論が主張しているのはそのような統語演算ではない。拙論が想定しているのは（16）のような再分析と構文化および構文の拡張である。また再分析の前提となる「自動詞文におけるゼロ動作主の読み込み」はすでに見たように広く観察される現象である。

3.2　動作主をめぐる初谷（2014）の議論

3.2.1　副詞句の分布について

次に動作主の位置づけをめぐる初谷（2014）の批判を検討する。

初谷（2014, 2015）は英語中間構文の成立のメカニズムを「属性叙述」と「反使役化」（影山（1996））に求める立場をとっている[21]。その立場から初谷（2014: 36）は「しかし、一方で、動作主を一般の人々や概念化者と捉えることについては問題もある」と述べて、英語中間構文の意味構造に（主語とは異なる）潜在的動作主が存在するという拙論ほか[22]の立場を 3 つの観点（副詞句の分布、話者・概念化者とは異なる動作主の可能性、中間構文と能格自動詞文の曖昧性）から批判している。

まずは副詞句の分布についての議論から入る。

（19）しかし、一方で、動作主を一般の人々や概念化者と捉えることについては問題もある。まず、willingly, carefully, skillfully, angrily, happily,

[21] この立場の問題点については本稿第 4 節で述べる。

[22] A and S (1994, 1995), Fellbaum (1985), Greenspon (1996), H and K (1987), Iwata(1999), Langacker (1991), 平井（2006）。

desperately, slowly といった行為者志向の様態副詞についてであるが、通常、これらの副詞は動作主の心的態度や動作様態を表すため、もし中間構文に潜在的動作主があるのなら、この構文と共起できそうに思われる。しかし、実際には不適格となる（Fellbaum（1985））。

（i）　a.　*The car drives willingly.　（松瀬・今泉（2001: 191））
　　b.　*These chairs fold up clumsily/competently.
（Fellbaum（1985: 24））

[ii] は適格な文であるが、この場合、willingly は潜在的動作主ではなく、主語名詞句である Sheila の態度について述べているという解釈しかない。

（ii）a.[23]　Sheila seduces easily and willingly.（Fellbaum（1985））
（初谷（2014: 36））

初谷の主張は次のように言いかえることができる。

（20）a.　意味構造に動作主ないし行為者が存在する文には行為者志向の様態副詞が生起可能である。
　　b.　中間構文では行為者志向の様態副詞は生起不可能である。
　　c.　したがって、中間構文の意味構造には動作主ないし行為者は存在しない。

しかしながら実際には（20a）は妥当ではない。そのことは Fellbaum（1985:27）が挙げる次の例から明らかになる。

（21）　a.　*Anyone / One can sell these novels proudly.
　　b.　*Anyone / One can plug this light in expertly.

すなわち、意味構造に動作主ないし行為者が存在する文であっても、行為者志向の様態副詞が生起できない場合があるわけである。したがって、これらの副詞が中間構文に生起できないということは、中間構文の意味構造に動作主ないし行為者が存在するということの反証になるものではない。

この問題には次の 2 つの論点が関わっている。

（22）　a.　中間構文の意味構造に動作主ないし行為者が存在するか。
　　b.　（存在するとして）その行為者は特定か任意か。

初谷は（22a）に関わる議論において行為者志向の様態副詞の振舞いを提示

[23] a. がついているのは原文のまま。

しているわけだが、実際にはこの振舞いが関わるのは（22b）の方なのである。ここで問題となっているタイプの副詞は特定の行為者の心的態度や技能に言及するものであるため、行為者が任意である文では容認不可になるということである。したがって、これらの副詞が中間構文に生起できないということは中間構文の意味構造に動作主ないし行為者が存在するということの反証になるものではないわけである。

3.2.2　話者・概念化者とは異なる動作主の可能性について

英語中間構文では動作主を *for* 句で明示することが可能である。このことが中間構文に動作主を想定する立場にとっては問題になるとして、初谷（2014: 36-37）は次のように述べている。

（23）また、（7）[24] に挙げた、動作主を for 句で表示できることが動作主が存在することの証拠になるという主張についてであるが、潜在的動作主が一般の人々や主体化された概念化者だとすると、たとえ for 句という形であっても別の動作主が明示された時点で、潜在的動作主解釈との衝突が起こることが予想される。しかし、そのようなことは起こらない。もし、動作主が明示された場合には潜在的動作主の解釈は自動的にキャンセルされる、というのであれば、その解釈はもともと随意的なものであると考えざるを得ない。

（iii）That book read quickly *for* Mary.(=(7))(Stroik (1992: 131))
（初谷（2014: 36-37））

これについてまず確認しておかなければならないことは、*for* 句で動作主を表示できるのは中間構文の典型例（*read* のような無対他動詞を含む能動受動としての中間構文の例）だけではないということである。

（24）非対格動詞
a．These muffins didn't **rise** *for* me.　（Alexiadou（2012: 1092））
b．Old habits **die** hard *for* some folks, Julie.　（Google Books）[25]

（25）非能格動詞
a．Ed has no trouble getting the baby to sleep, but she won't **sleep** *for* me.
（Alexiadou（2012: 1092））

[24] 本稿では下の（iii）。
[25] *The Mongoose Deception* (Robert Greer, 2009) p. 139.

b. The baby **sleeps** *for* you but not *for* me.

（McConnell-Ginet（1994: 234））

（26）道具主語構文ないし疑似中間構文

This pen **draws nice lines** *for* any decent calligrapher.

（Alexiadou（2012: 1092））

したがって、これらに共通の経験的な動機づけを求めることが有益であると考えられる。

ここで関係してくると思われるのは、人間には自分とは異なる他者にとっての環境の意味を知覚する能力があり、そのことが言語事実にも現れているということである（本多（2007, 2013a, 2013b））。ここでは次の日本語の例（本多（2013b: 第 20 章））に基づいて考えてみる。

（27） a. それおいしくないよ。苦いよ。麦茶じゃないよ。

b. そのドアは重くて開かないよ。

（27a）をここでは、子どもがビールを手にして口にしようとしているときの大人の発話と想定する。この時、その大人自身はビール好きであり、自分自身は子どもが手にしているビールを「おいしい」と感じていたとしても、この発話は適切なものと判断される。つまりあるビールについて自分では「おいしい」と感じる大人が子どもに対して同じビールのことを「おいしくない」と言ったとしても、虚偽の発話をしたとは見なされないわけである。

そして言うまでもなくこの場合、「おいしくない」にはビールを飲んでその味を評価するであろう経験者が想定されている。それはそのビールを手にしているその子どもである。

（27b）も同様である。この文は、力があって自分自身ではそのドアを開けることができる大人が力のない子どもに向かって発話する文として、適切であると評価されるものである。つまりあるドアに関して行為者としての自分にとっては「開く」と評価している大人が子どもに対して同じドアのことを「開かない」と言ったとしても、虚偽の発話をしたとは見なされないわけである。

そして言うまでもなくこの場合、「開かない」にはドアを開けようとするであろう行為者が想定されている。それはそのドアを開けようとしているその子どもである。

そしてこれらの例において、経験者あるいは行為者を明示することは可能である。

（28）　a.　ビールは**子どもには**おいしくない。
　　b.　そのドアは重くて**子どもには**開かないよ。

英語中間構文の典型例において *for* 句で動作主を表示することができること、また（24）（25）（26）のように中間構文の典型例以外でも同様に *for* 句で動作主を表示できること、これらのことの経験的基盤としては、このように、人間には自分とは異なる他者にとっての環境の意味を知覚する能力が備わっているということがあると考えられるわけである。

3.2.3　中間構文と能格自動詞文の曖昧性

初谷（2014）の最後の論点は能格動詞を含む文の曖昧性についてである。

（29）さらにもう一つの問題は、能格他動詞を用いた中間構文と能格自動詞文の曖昧性に関するものである。一般に、中間構文は一般の人々を潜在的動作主にとるのに対し、能格自動詞文は主語がひとりでにそのような事態に陥ったという、自発的な意味を表すとされる。しかし、影山（1996）では能格自動詞文について [iv c,d] のような例が挙げられており、必ずしも完全に自律的でなければならないわけではない。

（iv）　a.　This door opens easily.（=（6a））（中間構文）
　　b.　This door opened suddenly.（=（6b））（能格動詞文）
　　c.　The door opened because of a high wind.
　　d.　The door opened at a touch.　　（影山（1996: 145））

むしろ能格自動詞文において大切なのは、その主語名詞句の自発性、自力性が何よりもプロファイルされている、ということなのである。ところが、そうなると、背景化されてさえいれば潜在的にほかの動作主が存在しても構わないということになり、潜在的動作主の存在によって特徴付けられるはずの中間構文の解釈との境界線が明確ではなくなってくる。　　（初谷（2014: 37））

英語中間構文の意味構造に（主語とは異なる）潜在的動作主が存在するという立場を批判する文脈で出されていることを踏まえてこの議論を再構成すると次のようになると思われる。

（30）　a.　中間構文と能格自動詞構文の区別は通常の議論では「中間構文には主語とは異なる潜在的な動作主が存在するが能格自動詞構文ではそのような動作主は存在せず、文の表す出来事は主語によって

自発的に引き起こされると捉えられている（だから能格自動詞構文のみが（*all*）*by itself* と共起できることになる）」とされている。

b. しかし能格自動詞構文の場合でも、主語とは異なる潜在動作主が存在する場合がありうる。したがって能格自動詞構文と中間構文の区別についての上の考え方には問題がある。

c. したがって「中間構文には主語とは異なる潜在的動作主が存在する」という主張には問題がある。

能格自動詞構文の場合でも主語とは異なる潜在動作主が存在する場合がありうるという議論は拙論の立場と一致する。また中間構文を能格自動詞構文と連続するものと捉える立場は初谷自身の立場と一致するものであるが、これも拙論の立場とも一致するものである。したがってここに述べられていることは拙論にとって問題になるものではない[26]。

4　中間構文についての初谷の代案の検討

本節では英語中間構文についての初谷（2014，2015）自身の考え方を検討する。初谷（2015: 3-4）は自身の立場を次のように要約している。

（31）一方、拙著（2014）では、中間構文の構造を、能格自動詞構文と同様に、影山（1996）が言うところの「反使役化」によって動機付けられていると主張した。つまり、他動詞構文の構造がまず基盤としてあり、そこから「反使役化」による使役主と変化対象の（ある種の）同定によって自動詞構文構造が生じる、とする考え方である。そこでの議論で、筆者は、中間構文の反使役化というプロセスを動機づけているのが、対象が持つ「性質」や「属性」であり、それらが動作主よりも述語動詞事態の成立に対してより大きな影響力を持つ（責任がある）と認識されることによって（動作主はある種、意図や意志を持たない、単なる行為遂行のためのツールのような扱いになるとも言える）、それらの名詞句が主語として選択されるようになる、と主張した。この考え方に基づけば、中間構文の持つ「属性記述」という意味合いは、動作主を選ぶことなく対象の「性質」や「属性」によって（のみ）述語動詞の事態が成立するという事態を表現するこの構文の、そもそも

[26] なお（30）の再構成が妥当だとすると、（29）は「通常の議論は能格自動詞についての見解に問題がある」を根拠に「通常の議論は中間構文についての見解に問題がある」を主張する議論になっていることになる。中間構文と能格自動詞構文が（連続相にあるとはいえいちおうは区別される）別の構文であることを考えると、この論理は奇妙と言えば奇妙である。だが筆者にはこの再構成しかできない。この点についてはこれ以上の検討は避けたい。

の動機付けに起因するものにすぎないと言えることになる。
（初谷（2015: 3-4））

すなわち初谷は英語中間構文の成立のメカニズムを「属性叙述」[27] と「反使役化」に求める立場をとっていることになる。

影山（1996）の言う「反使役化」とは次のようなものである。

（32）　[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]
→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]　（影山（1996: 145））

これは *open*、*break* などの有対能格動詞に適用されるもので、他動詞から自動詞を派生する操作である。この操作について初谷（2014: 38）は次のように解説している。

（33）使役主（x=y）が変化対象（y）と同定され、意味的に束縛される。束縛を受けた使役主は変化対象と同一物であることが意味構造上で保証されるため、統語的には抑制されて統語構造には現れない。その結果、BE の主語である内項（y）だけが項構造にリンクされ、外項の位置は空欄になるために、能格自動詞は内項のみを持つ「非対格自動詞」の構造を持つことになる。この操作によって、能格自動詞文では、あたかも「変化対象（y）が自ら変化する」かのような意味が表されることになるわけである。（初谷（2014: 38））

能格動詞の自他交替に反使役化を想定する立場 [28] は、言いかえれば、能格自動詞の主語は同時に変化対象とその変化を引き起こす使役主の両方であると考える立場である。中間構文成立の動機づけをこの反使役化に求める立場は中間構文に主語以外の動作主を想定する立場とは相いれない。第 3.2 節で紹介したように初谷（2014）が中間構文に潜在的動作主を想定する立場に批判的であったのには、このような事情が関係していると思われる。

中間構文成立の動機づけを反使役化に求める立場は、一つの重大な予測をする。それは次のようなものである。

（34）中間構文に現れることができる動詞は、自他交替を引き起こす能格動詞に限定される。自動詞用法を持たず、他動詞のみで用いられる動詞

[27] 初谷は「属性記述」の用語を用いているが本稿では叙述類型論の文脈で通常用いられる「属性叙述」を用いる。
[28] 筆者自身はこの立場はとらない。これについては本多（2020 予定 b）などで議論する予定である。

は中間構文に現れることができない。

これについて初谷（2014: 42-43）は次のように述べている。

（35）一方、中間構文の成立に反使役化が関わっているとすると、（32a）[29] から明らかなように、変化対象の力だけでは発生しないような出来事、すなわち、どうしても外的な動作主が必要な出来事については、このプロセスは適用できないということが予想される。例えば、make、build、write といった作成を表す動詞や、murder のような殺人を表す動詞などは、対象物の自発性だけでは事態が発生しえないため反使役化による自動詞化ができない動詞群であるが、これらの動詞は [v] のように中間構文にも適用できない。

（v）a.　*This kind of error makes easily.　（影山（1996: 277））
　　b.　*This kind of poem writes easily.　（F and ZH（1989: 11））
　　c.　*This type of bridge builds easily.　（ibid.）
　　d.　*Wool sweaters knit easily.（Fellbaum　（1986: 17））

このことも、中間構文の形成に反使役化が関わっている一つの証左と考えられる。　（初谷（2014: 42-43））

上記引用（15）で初谷（2015）が拙論の枠組みに関して「過剰な一般化を招く恐れがあると思われる」と述べているのはこのことを想定していると思われる。拙論が想定している再分析は無対他動詞が「能動受動」として中間構文に現れることを原理的に許容するものであるが、実際には初谷が（35）で述べるように（v）のような無対他動詞は中間構文で用いることができないからである。

それに対して初谷のように中間構文の成立のメカニズムを反使役化に求め、中間構文に現れることができる動詞は自他交替を起こす能格動詞に限られるとする立場を採用すれば、この「過剰な一般化」ないし過剰生成は避けられることになる。

しかし実際には反使役化によるアプローチは妥当ではない。初谷のアプローチは英語中間構文の典型例とされる次のようないわゆる「能動受動」の例をすべて容認不可と予測することになるからである。

（36）　a.　This book reads easily.
　　b.　The book sells well.

[29] 本稿には引用していない。

c. These clothes wash in warm water.
d. This car steers like a dream.
e. This piano plays easily.

初谷が挙げる容認不可能な例はいずれも反使役化とは別の要因で説明することが可能である[30][31]。

5　結語

以上、英語中間構文についての拙論を取り上げた論考（初谷（2014, 2015））について筆者の回答を提示した。本稿が英語中間構文についての研究を前進させる上で僅かでも貢献できれば幸いである。

参考文献

Ackema, P. and Schoorlemmer, M. (1994). “The Middle Construction and the Syntax-Semantics Interface,” *Lingua* 93, 59-90.

Ackema, P. and Schoorlemmer, M. (1995). “Middles and Nonmovement,” *Linguistic Inquir*y 26(2), 173-197.

Alexiadou, A. (2012). “Noncanonical Passives Revisited: Parameters of Nonactive Voice,” *Linguistics* 50(6), 1079-1110.

Denison, D. (1993). *English Historical Syntax: Verbal Constructions*. Long-man.

Evans, N. and Wilkins, D. (1998). “The Knowing Ear: An Australian Test of Universal Claims about the Semantic Structure of Sensory Verbs and their Extension into the Domain of Cognition,” Institut für Sprachwissenschaft (Köln): Arbeitspapier; N.F., Nr. 32. Available from http://publikationen.ub.uni-frankfurt.de/frontdoor/index/index/docId/24544.

Evans, N. and Wilkins, D. (2000). “In the Mind’s Ear: Semantic Extensions of Perception Verbs in Australian Languages,” *Language*, ***76*** (3), 546-592.

Fellbaum, C. (1985). “Adverbs in Agentless Actives and Passives,” *CLS* 21, *Parasession on Causatives and Agentivity* 21-31.

---

[30] 具体的な議論は本多（2005）を参照されたい。

[31] ちなみに Kageyama（2006: 102）は中間構文に関して反使役化とは異なる分析を採用している。

（ii）Middle formation at Argument Structure
（Ev（x <y>））
a. Ev-suppression →（Ev^（x <y>））
b. collateral suppression of agent →（Ev^（x^ <y>））
c. property description by lambda abstraction → λy（Ev^（x^ <y>））

Fellbaum, C. (1986). *On the Middle Construction in English.* Indiana University Linguistics Club Publications.

Fellbaum, C. and Zribi-Hertz, A. (1989). *The Middle Construction in French and English: A Comparative Study of its Syntax and Semantics*. Indiana University Linguistics Club Publications.

Greenspon, M. D. (1996). *A Closer Look at the Middle Construction*. Doctoral dissertation, Yale University.

Hale, K. L. and Keyser, S. J. (1987). *A View from the Middle*. Lexicon Project, Center for Cognitive Science, MIT. (Lexicon Project Working Paper 10.)

Heine, B. (2002). "On the Role of Context in Grammaticalization," In I. Wischer and G. Diewald, *New Reflections on Grammaticalization*, 83-101. John Benjamins.

Iwata, S. (1999). "On the Status of an Implicit Arguments in Middles," *Journal of Linguistics* 35, 527-553.

Kageyama, T. (2006). "Property Description as a Voice Phenomenon," In T. Tsunoda and T. Kageyama (eds.) *Voice and Grammatical Relations: In Honor of Masayoshi Shibatani*, 85-114. John Benjamins.

Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume II: *Descriptive Application*. Stanford University Press.

McConnell-Ginet, S. (1994). "On the Non-Optionality of Certain Modiers," In M. Harvey and L. Santelmann (eds.) *SALT IV*, 230-250. Cornell University.

Sakamoto, M. (2001). "The Middle and Related Constructions in English: A Cognitive Network Analysis," *English Linguistics* 18(1), 86-110. Available from https://doi.org/10.9793/elsj1984.18.86 .

Stroik, T. (1992). "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23(1), 127-137.

Taylor, J. R. and Yoshimura, K. (2006). "The Middle Construction as a Prototype Category,"『日本認知言語学会論文集』6, 362-370.

Traugott, E. C. and Trousdale, G. (2013). *Constructionalization and Constructional Changes.* Oxford University Press.

Yoshimura, K. and Taylor, J. R. (2004). "What Makes a Good Middle? The Role of Qualia in the Interpretation and Acceptability of Middle Expressions in English," *English Language and Linguistics* 8(2), 293-321.

影山太郎（1996）.『動詞意味論』. くろしお出版 .

萱原雅弘（2006）.「中間構文に関する通時的考察」.『東京家政学院大学紀要人文・社会科学系』46, 73-82. Available from http://www.kaseigakuin.ac.jp/library/kiyou/zenbun/46H6.pdf .

初谷智子（2014）.「英語中間構文の意味特性 :「非明示的動作主」は何か」.『姫路獨協大学外国語学部紀要』27, 33-48. Available from http://id.nii.ac.jp/1567/00000063/.

初谷智子（2015）.『英語中間構文における属性描写と行為可能性』『ことばの研究』6，1-12.

初谷智子（2016）.「中間構文の意味と形式―属性叙述と構文ネットワーク―」.『姫路獨協大学外国語学部紀要』29, 17-30. Available from http://id.nii.ac.jp/1567/00000040/.

平井剛（2006）.「英語中間構文の意味構造」. 山梨正明ほか（編）『認知言語学論考 No. 5』，79-118．ひつじ書房.

本多啓（1999）.「再び英語の中間構文について」.『駿河台大学論叢』18, 137-156.

本多啓（2002）.「英語中間構文とその周辺―生態心理学の観点から―」. 西村義樹（編）『認知言語学 1：事象構造』，11-36．東京大学出版会.

本多啓（2005）.『アフォーダンスの認知意味論―生態心理学から見た文法現象』. 東京大学出版会 .

本多啓（2007）.「他者にとっての環境の意味の知覚についての覚書」.『神戸外大論叢』58(6), 31-47. Available from http://id.nii.ac.jp/1085/00000864/ .

本多啓（2009a）.「日本語の無標識可能表現と英語の中間構文」. 関西言語学会第 34 回大会（2009 年 6 月 6 日）口頭発表.

本多啓（2009b）.「日本語の無標識可能表現について―原因帰属理論の観点から―」. 国際シンポジウム「認知言語学の拓く日本語・日本語教育の研究と展望」（北京大学）における口頭発表（2009 年 10 月 18 日）.

本多啓（2013a）.「言語とアフォーダンス」. 河野哲也（編）『倫理：人類のアフォーダンス』，77-103．東京大学出版会.

本多啓（2013b）.『知覚と行為の認知言語学―「私」は自分の外にある』. 開拓社.

本多啓（2013c）.「中間構文の英日対照とその理論的な意義」. 口頭発表。日本英語学会第 31 回大会シンポジウム「ヴォイスの対照研究はどこまで進んだのか、そしてどこに向かうのか―研究史の再評価と今後の展望にむけて―」（2013 年 11 月 10 日、福岡大学）.

本多啓（2014）.「プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考」.『神戸外大論叢』64(1), 15-43. Available from http://id.nii.ac.jp/1085/00001631/.

本多啓（2015a）.「日本語と英語の無標識可能表現について」. 2015 年 1 月 23 日（金）第 41 回日本語教育学講座講演会（名古屋大学）

本多啓（2015b）.「可能表現と自己の境界」. 田村敏広・西田光一・深田智（編）『言語研究の視座―坪本篤朗教授退職記念論文集』, 378-396. 開拓社.
本多啓（2016）.「Subjectication を三項関係から見直す」. 中村芳久・上原聡（編）『ラネカーの（間）主観性とその展開』, 91-120. 開拓社.
本多啓（2017）.「可能表現の認知意味論―英語中間構文と日本語無標識可能表現を含めて―」. 東京言語研究所集中講義（2017 年 9 月 9 日、9 月 10 日）.
本多啓（2020 予定 a）.「英語における無標識可能表現のネットワーク」.（共著論文集掲載予定論文）.
本多啓（2020 予定 b）.「自発と可能のつながりについて：Absolute Construal と原因帰属」.（共著論文集掲載予定論文）.
松瀬育子・今泉志奈子（2001）.「中間構文」. 影山太郎（編）『日英対照　動詞の意味と構文』, 184-211. 大修館書店.

Keywords: 英語中間構文　反使役化　動作主　再分析　構文化